三光丸の歴史 其ノ四

History

700年の歴史をたどる

三光丸創製の秘密にせまる

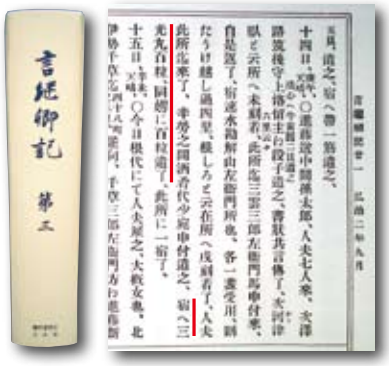
『言継卿記』に登場する「三光丸」

前々号（第2号）でも少しふれましたが、山科言継は、京都の山科を領地とした戦国時代の公家で、京都や堺、あるいは郡山に店を構えた薬種商たちから、原料の生薬を買い入れ、自らさまざまな薬を処方したことで知られます。

彼が作った薬は、帝や公家仲間のみならず、武家や庶民にいたるまで分け与えられ、旅行のみやげとしても喜ばれたようです。

「根しろと云在所へ戌刻着了、人夫此所迄来了、辛労之間酒肴代少宛申付遣之、宿へ三光丸百粒、同娚に百粒遣了」

……旅の途中、宿屋に到着した言継卿は、荷物を運ばせた者たちに心付けを渡し、宿屋へは、三光丸を計200粒与えています。



『言継卿記』（1550～65年）より

医者に扮し、将軍を救出した米田求政

同じころ、米田氏が医薬の道に通じていたことを示す出来事が、京都で起きました。

永禄8年（1565）、第13代将軍足利義輝が、京都の二条御所で、松永久秀や三好三人衆のたくらみにより暗殺されるという事件が勃発しました。当時、将軍の弟、足利義昭は、出家して「覚慶」と名乗り奈良の興福寺にいましたが、松永らは、彼をそのまま興福寺に幽閉し、多数の兵士をつけて監視しました。

やがて、義輝の側近だった細川藤孝（幽斎）や一色藤長らの援助により、無事興福寺を脱出、その後、第15代将軍となりますが、実はその際、医薬に関する豊富な知識を買われ、医者として興福寺に入り込んだのが、米田家の先祖、米田求政でした（米田家家系図では「永政」とも記す）。

求政は覚慶を診察しながら外部の情報を伝え、その働きにより、見事救出作戦は成功を遂げたのです。

三光丸の古い版木より

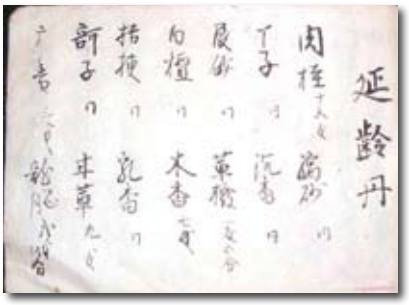
三光丸のルーツは興福寺？

鎌倉時代から室町時代にかけて、南都興福寺は幕府でさえ一目置くほどの強大な勢力を誇りました。また、興福寺内の「多聞院」という子院で、漢方処方の知識を持った僧侶たちが、さまざまな薬を製造し、信者に分け与えたことでも知られます。

当時、越智氏と米田氏は興福寺と非常に深いつながりを持っていましたので、想像をたくましくするならば、三光丸の製法も、あるいは興福寺から伝えられたものかもしれません。

興福寺南円堂

江戸時代に描かれた興福寺。
猿沢池の南東、赤い矢印が多聞院。



米田家に伝わる薬の秘伝書『家法副』。

『家法副』に記された三光丸の製法。
他人が見てもわからぬよう、暗号を用いている。

米田家に伝わる薬の秘伝書によれば、三光丸の原料は、江戸時代のころから、きっちりとした整数比になるよう、配合されていました。この点が他の多くの「家伝薬」「秘伝薬」と呼ばれる薬と違うところです。このように、明らかに漢方（中国医学）の思想によって作られた薬でありながら、センブリという日本固有の薬草を用いている点も、大変ユニークで、三光丸創製の秘密に、さらなる深みを与えているのです。

三光丸クスリ資料館　館長　浅見　潤

株式会社三光丸本店　株式会社三光丸配置研修部　三光丸だより VOL.004
発行／三光丸だより編集部　発行／2011年11月　制作／株式会社コミニケ出版